

河北抄

「なにがなんだかわからない。もうおわりかな…。かなしいな」。認知症を患った女性(79)が自室でつづった紙片の数々。入居していた名取市のグループホーム「おうじゅ」の職員が見つけた。

その文章は心の叫びだった。長年、ライフワークとして打ち込んできたのが絵手紙。大切にしてきた絵筆を箸の代わりにするなど、道具の使い方すら分からなくなっていた。

「もう描けなくなったのかもしれない」。ホーム側が道具を預かった。それを知った家族の悲しい表情を職員は忘れなかった。「もう一度、絵手紙やってみましょう」。一对一の習練が始まる。

野菜や果物をテーブルに置く。隣に座って絵を描くまねをするなどして、思い出してもらう努力を重ねた。その結果、完成した作品は数十枚にもなった。

職員の発案でことしのホームのカレンダーとなり、35部が地域に配られた。月ごとにバナナやコスモス、ウサギなどが素朴なタッチで描かれている。

「うれしい」「おいしそう」の添え書きも。絵手紙に再び取り組むようになってから、「悲嘆の文」は見つかっていないという。(2014・1・21)

2014年01月21日火曜日